

♪ 主題と変奏——臨床便り

## 第7回

“そのものがたり”  
——「ナラティヴ変奏曲」

野村直樹

[名古屋市立大学]

最近日本でも市民権を得た「ナラティヴ」。これには二つの側面があるという。一つは、始まりと終わりがある「物語」、つまり「語られたもの」という側面。小説や昔話はその例だ。そして、もう一つの側面。それは、やりとりが現在進行している会話や討論など、「語っている状況」という側面。前者が「ナラティヴ」の静止画なら、後者はその動画にあたる。

「そのものがたり」という表現は、区切り方によって二つの読みになる。「その／ものがたり」と読めば、“the story”の意味になり、お話、物語を意味して、「語られたもの」という側面に光が当たる。“the”が付くことで、世界に一つしかない「私」、「あなた」の物語となる。ところが、それを「そのもの／がたり」という区切りで読むと？ 「語り」を「語る」に移行すれば、「そのもの(が)語る」となって物や事象が語りだす。「絵が何かを訴えている」はその例だ。

しかし、「そのもの／がたり」は「そのもの(を)語る」とも読める。すると、語り手は「私」になる。語り手の私が誰かに向かって「そのもの」、たとえば観た映画について語る。

一方、「そのもの／がたり」を「そのもの(へ)語る」と読むと？ 語り手は「私」だが、「私」が「そのもの」に向かって語りかける。長時間走ってくれたマイカーにひと言感謝する。亡くなった人の墓標にむかって語る。

さらに、「そのもの／がたり」を「そのもの(と)語る」と読めば、二つの読みが想定される。一つは「そのものを相手に会話する」という読み方。風を読んで小型ヨットを操る。その航行は風との対話であろう。だが、「そのもの(と)語る」には、「そのもの(と共に)語る」という読みも控えている。すると、「もの」と「私」の対等性が強調され共同声明になる。新車を披露する社長は、その「新車(そのもの)と共に」メディアに語る。

次に、抽象度を上げ「そのもの＝語り」という等式で捉えると、「もの」が「語り」を代行する。季節が巡って先方にお歳暮を届ける。お歳暮は何かを意味している。「もの＝(無言の)語り」である。また、「語り＝もの」ならば、「語り」が「そのもの」にもなる。疲れた人にねぎらいの言葉をかけるとき、言葉は「贈り物」、「もの」である。

「そのものがたり」は、二つの区切り方でナラティヴの二側面を言い表す。「語り」を「語る」という動詞に移すと、助詞の変化はナラティヴの世界を縦横に開く——『ゴルトベルク変奏曲』の30の変奏を若きグレン・グールドが変幻自在に弾いた時のように。

重要なのは、「そのものがたり」は非言語の領域を無理なく射程に入れることだ。「ナラティヴではしぐさや行為など非言語は除外か？」は、よく出る質問である。しかし、「そのもの(が)語る」、「そのもの(へ)語る」、「そのもの(と共に)語る」、「そのもの＝語り」という読みに見られるように、「そのものがたり」は初めから非言語コミュニケーションを前提している。

ほくは、ある美術館のポスターでこの言葉に出会った。茶器の展示に『そのものがたり』とあった。担当の学芸員から話を聞くと、彼女は、茶道具一つひとつが「美術館所蔵に至るまでの経緯」を、「そのものがたり」と表現したかったと言った。『源氏物語』の世界を本居宣長は「もののあはれ」と呼んだが、日本語の「もの」には古来広い意味がある。ほかしの効果もある。「そのものがたり」の曖昧さと広さも、またその伝統を引く。